

日本語複文におけるテンス情報の継承

吉 本 啓

要 旨

日本語の複文中の従属節のテンスの解釈は複雑な要因によって決定されるが、特に南 (1974) の文階層構造説が深く関わっていることが知られている。本稿では、統語解析情報付きコーパス (ツリーバンク) によって得られる日本語の用例データが、文階層構造説を基本的前提として、典型的 / 例外的両様の文法規則の併存を許すデフォルト推論の枠組みを用いて説明可能であることを示す。

キーワード：テンス，意味論，形式意味論，日本語文法，複文，従属節

1 イン트로ダクション

日本語の複文中のテンス解釈は複雑であり、ある場合には主節の表すテンスにもとづいて行われ、またある場合には発話時に依存することが知られている。吉本 (1993) および Yoshimoto (1998) では、南 (1974) の文階層構造説に依拠し、テンス情報が3つの階層ごとに段階的に導入されると想定することにより説明を試みた。

他方、複文を含む日本語のテンスに関する研究は、従来、主として作例を中心とし、実例を扱うにしても比較的少量の言語データについて行われてきた (寺村 1971, 工藤真由美 1995, 日本語記述文法研究会 2007 等)。日本語に関してもコーパスを使った研究が普及しつつある今日、コーパスにより得られる大量の言語データの調査にもとづく新しい視点からのテンス研究が求められている。この報告では、文統語構造による例文検索を可能にするためのきツリーバンク (パトラー・長崎・吉本 近刊) から得られる例文を検討することにより、上記の仮説が現実の日本語データに対し適用できるか否かを検証し、また複文テンス解釈の言語モデルを提案する。

2 テンスと主語と文階層

日本語の複文のテンス解釈は従属節の種類に応じて変化するが、このことは主語が主節・

従属節間で一致するか否かという問題と並行的であることが観察されている。

接続詞「ながら」や「つつ」により導かれる従属節の中には、過去の助動詞「た」があらわれないことがある。

- (1) a. 太郎が新聞を読みながら食事していた。
- b. *太郎が新聞を読んだながら食事していた。

これらの種類の従属節においては独立したテンス解釈は行われず、その述語の成立時はつねに主節のそれに一致していると考えられる。

他方、「から」、「ので」、「のに」のような接続詞により導かれる従属節の内部には「た」の出現が許される。この場合、「た」の有無に関わらず、従属節述語のテンス解釈は、(2a)のように主節述語の成立時か、または(2b)のように発話時を基準として行われる。

- (2) a. 春子が休んでいるので電話した。
- b. 春子が休んでいたので電話する。

最後に、「が」や「し」のような接続詞をヘッドとする従属節中にはやはり「た」があらわれないことができるが、その述語のテンス解釈は、主節の成立時とは独立して、発話時を基準として行われる。なお、「生き生きした描写にするとという表現効果」(日本語記述文法研究会 2007, p. 133)を挙げるために(3b)のような非タ形述語を過去の事象の表現に用いるという用法があるが、これは別問題とする。

- (3) a. 春子はスペインへ行ったが秋子はイタリアへ行く。
- b. 太郎は進学するし次郎は就職する。

従属節と主節の述語の主語が一致するか否かという問題もまた、上記のように従属節の種類に応じて差異を見せることが指摘されている(三上 1970)。

まず、「ながら」や「つつ」のような接続詞の導く従属節の中には、主語があらわれないことができず、その述語は主節と共通の主語を持つものとして解釈される。

- (4) a. 太郎は新聞を読みながら食事していた。
- b. 太郎が新聞を読みながら食事していた。

これに対して、「と」や「ので」のような語をヘッドとする従属節を伴う複文においては、

主節・従属節ともに独自の主語を有することができる。主語が一つしか明示されない場合、(5a)のように主題化されず格助詞「が」により表示されるのであれば、省略された主節主語は従属節の主語と異なる対象を指示する傾向が強い。他方、(5b)のように主語が係助詞「は」により主題化されていれば、主節・従属節双方の主語は同一となる。

- (5) a. 太郎が上着を脱ぐとハンガーに掛けた。
 b. 太郎は上着を脱ぐとハンガーに掛けた。

最後に、「から」、「し」、「が」のような接続詞により作られる従属節を持つ複文において、2つの主語は相違していてもよいし、そのことは主語が主題化されているか否かに無関係という傾向が強い。

- (6) a. 太郎が上着を脱いだからハンガーに掛けた。
 b. 太郎は上着を脱いだからハンガーに掛けた。

次節で述べるように、南(1974)等は従属節ヘッド(接続詞)を共起関係によってより狭いものからより広いものへの順に(A)ながら、つつ、(B)と、ので、から、(C)から、し、が、のように分類している。本節で見たように、この分類に応じて、従属節のテンスや主語の解釈は特徴的な違いを見せる。ここでは省略するが、他の文法事象、例えば否定のスコープについても同様である(田窪 1987, 吉本 1993, Yoshimoto 1998)。このことは、第5節に示すように、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ の順で文構成要素の意味を担う変項(variables)が段階的に導入され、より内側の階層(B, Cに対してA; Cに対してB)の文構成要素の解釈がより外側の階層の変項を参照して行われる、という日本語文解釈の原理としての統語・意味論的な仮説を導く。

3 文の階層構造

南(1974)は、様々な文構成要素——格名詞句、副詞、従属節、係助詞句、および動詞、助動詞、終助詞等——がその中に生起しうるかどうかによって従属節およびその節を構成しうる要素をA, B, C, Dの4種類に分類している。さらに南は考察を従属節の構成だけに留めず、これら4段階からなる階層がより一般的に日本語の文の基本構造であると考え。A~Dのうち、より右側の節はより左側の、より中核的意味を表す節を埋め込むことで成立する。

田窪(1987)は南(1974)に対し修正を少し加え、それぞれの階層の構成を以下のように

示している。

- (7) A = 様態・頻度の副詞 + 補語 + 述語
- B = 制限的修飾句 + 主格 + A + (否定) + 時制
- C = 非制限的修飾句 + 主題 + B + モーダル
- D = 呼掛け + C + 終助詞

また、田窪 (1987) は、それぞれの節に与えられる統語カテゴリーおよび意味タイプを次のように提案している。

- (8) A = 動詞句 動作
- B = 節 事態
- C = 主節 判断
- D = 発話 伝達

形式意味論の観点からは、これらの階層は、主語、主題、非主語格名詞句、副詞句、アスペクト、テンス、モーダル要素等様々な文構成要素の意味を担う変項 (variable) のスコープ間に単純な埋め込み関係を与えて効率的に管理するためのシステムと見る事が出来る。より内側の変項の解釈に当たってはより外側の変項が参照できるが、その逆は無い、という片方的な継承関係がその特徴である。そのため、同一レベルの階層が一つの上位の階層に複数含まれる場合、それらに含まれる同種類の変項の値は異なってもよい。例えば、2つのB節が同一のC節の中に含まれ、それぞれの主語が指示する対象が相違する、ということがありうる。

しかしながら、どの文構成要素をどの階層に割り当てるかという問題の詳細については、いまだに決着を見ていない。分類の基準として何を採用するかによって結果が異なるということがこれまでに指摘されている。本稿で主として取り上げる、接続詞「ので」および「から」をヘッドとする従属節 (以下、「ノテ節」および「カラ節」と呼ぶ) にしても、分類の仕方は様々である。南 (1974) ではノテ節はB、カラ節はCとされるのに対し、吉本 (1993) ではノテ節はB、カラ節はBおよびCの両方に属するとされている。また田窪 (1987) は、ノテ節、カラ節ともにBとCの両方に割り当てている。

これに関連して、従属節ヘッド (多くは接続詞) と他の構成素との関係は、それが共起可能か否かという点で明確に二分できるものではなく、しばしば例外を含むものであることが知られている (例えば、「ながら」節における主語名詞句の出現)。

筆者は、文脈による変容を許容する語句の意味を文の意味へと統合することが文の階層の

果たす機能であり、文階層を厳格に規定することの難しさはそのことに起因すると考えている。そして、ツリーバンクの提供する言語データを検討することにより、そのダイナミックな働きを跡付けることができるのではないかと期待している。しかし、そのことは他の機会に譲り、本稿では、動詞句を中心とし、もっとも中核的な A 節から始まり、その左右に段階的に構成素が付け加えられ、それによって変項が逐次導入される、という日本語文の統語的・意味論的形成の原理を「文階層説」と呼び、本論の前提とする。具体的にどの構成素がどの階層に属するかという問題は、接続詞「ので」および「から」、および述語タ形と非タ形に関するもの以外はオープンなままにしておく。その上で、B 節および C 節が担うテンス意味に焦点を当て、ノデ節、カラ節ともにデフォルトとしての B 節から条件により C 節に交替しうるとの仮定に立って、言語データを説明するための規則を検討する。

4 データの観察と説明

ここで、ノデ/カラ従属節を伴う複文における主節・従属節の非タ形/タ形それぞれの組み合わせについて、それらのテンスの意味がどのように観察されるかを以下にまとめる。

(i) タ形 - ノデ/カラ - タ形

従属節述語が状態的である場合、その多くについて、成立時が主節成立時と同時であるとされる。そのため、(9a) は (9b) と同じ意味となる。

- (9) a. 天気が良かったので、公園を散歩した。
b. 天気が良いので、公園を散歩した。

この場合、従属節述語 ((9a) では「良かった」) の成立時 (E_s とする) のテンス解釈のための基準時 (S_s とする) は発話時 (U で表示する) である (つまり、「た」の表す意味 $E_s < S_s$ も加えると、 $E_s < S_s = U$) ことから、Comrie (1985) の言う「絶対テンス」であるとする者が多い (工藤 1995 等)。

なお、絶対テンスか相対テンスか、主節か従属節かに関わらず非タ形・タ形のテンス意味を統一的に扱うために基準時 (S) を導入する。タ形の語彙の意味は成立時が基準時以前であることであり ($E < S$)、非タ形の意味は、状態的であれば成立時が基準時と重複し ($E \circ S$)、動作的であれば成立時が基準時以降であることである ($E > S$)。相対テンスの場合は、基準時は主節成立時と一致、絶対テンスについては基準時は発話時と同じ、とすればよい。なお、本稿では、(9a) の従属節述語タ形は (9b) の非タ形と同一の意味を持つことから、そ

の成立時が基準時と重複する (E ○ S) と考える (7 節 (i) を参照のこと)。伝統的な研究では基準時と同時とすることも多いが、正確を期す。より正確には $S \subset E$ であろうが、E ○ S はこれを含む。

従来の日本語の当該分野の研究では、「相対テンス」の語は基準時の主節述語成立時との一致、「絶対テンス」は発話時との一致に用いられてきた (例えば、工藤 1995)。この捉え方自体はよいが、しばしば、これらの意味が二者択一的に用いられてきたことは問題である。

(10) 鈴木さんは体調が悪かったので、早目に帰らせた。

上記の文の従属節述語「悪かった」の成立時は過去で発話時以前だから絶対テンスと言え
るが、かと言って過去のどの時点でもよいというわけではない。この場合、従属節述語と主
節述語とは関連づけられている。直観的に相対テンス / 絶対テンスと呼ばれてきた事象への
より良いアプローチが必要になる。

従属節が動作的述語を持つ場合は、その基準時は主節の成立時であり、成立時は主節成立
時 (E_m とする) よりも以前となる ($E_s < S_s = E_m$)。このことから、「相対テンス」である
とされる。

(11) 散歩中に財布を拾ったから交番に届けた。

(ii) 非タ形 - ノデ / カラ - タ形

従属節述語が状態的である場合、その成立時は主節と同時で、基準時が主節成立時と重複
すると考えられる ($E_s \circ S_s = E_m < U$) ことから、相対テンスとされる。

(9) b. 天気が良いので、公園を散歩した。

動作述語を従属節を持つ場合については、その成立時は主節成立時以降となるが、基準時
が主節成立時と一致すると考えられる ($E_s > S_s = E_m < U$) ことから、相対テンスとされ
る。

(12) 翌日から出張するので荷物をカバンに詰めた。

(iii) タ形 - ノデ / カラ - 非タ形

状态的、動作的の区別にかかわらず、従属節述語の成立時は過去であり、基準時は発話時と見なされる ($E_s < S_s = U$) ことから、絶対テンスとされる。

(13) このバッグは毎日使っていたので、かなり傷んでいる。

(iv) 非タ形 - ノデ / カラ - 非タ形

この組み合わせの場合も、(iii)と同様に従属節のテンス解釈の基準時は発話時で、その成立時は、状態述語なら現在、動作述語なら未来となる。絶対テンスと見なされる。

(14) この部屋は窓が北向きなので冷え冷えとしている。 ($E_s \circ S_s = E_m = U$)

(15) 学生たちは、就職するのもうすぐ研究室を出て行く。 ($E_s > S_s = U < E_m$)

5 先行研究

Kamp and Reyle (1993) の Discourse Representation Theory (DRT) ではテキスト中の事象の成立時や時間副詞や発話時の情報をディスコース指示詞 (discourse referents; 変項とほぼ同じ) として、さらに視点も導入し、それらの間の関係を前後関係 (<), 重複 (○), 同時 (=) 等の少数のオペレーターにより関連づけることによって分析する方法を提案している。

吉本 (1993) および Yoshimo (1998) では Kamp and Reyle (1993) を基礎として、日本語の複文のテンス意味の理解と生成を、階層ごとの段階的な情報の導入によって説明した。その主要部分のみを、文 (16) について示す。

(16) 春子が休んでいるので電話した。

その意味の理解と生成は、以下に示す文の構成素ごとの働きが組み合わさって行われる。

- (17) i. 非タ形従属節状態述語: 成立時は基準時と重複 ($E_s \circ S_s$)
- ii. 「ので」(B 従属節を導き、B 主節に埋め込む): 従属節基準時は主節成立時と同時 ($S_s = E_m$)
- iii. タ形主節述語: 成立時は基準時以前 ($E_m < S_m$)

iv. C 節：基準時は発話時と同時 ($S_m = U$)

(15. i ~ iv) を合わせると、(16)の正しいテンス意味 $E_s \circ S_s = E_m < S_m = U$ (集約すると、 $E_s \circ E_m < U$) が得られる。B 節で基準時の導入と同定、C 節で発話時の導入・同定が行われることがこのモデルの核となっている。

複文の主語の理解もまた、これと同様の段階的な情報の導入によって説明することができる。

(5) b. 太郎は上着を脱ぐとハンガーに掛けた。

この文の理解のプロセスは以下のとおりである。

- (18) i. B 従属節における主語の導入と同定：主語は欠如している。その同定は課題として後に持ち越される。
- ii. C 節における主題の導入と同定：主題は「太郎」である。
- iii. 欠如した主語の同定：ゼロ代名詞補完の語用論規則の1つを発動、主語を主題「太郎」と同定。

このように、複文におけるテンスの理解および主語の一致 / 不一致という2つの問題ともに、複文を含む日本語の文の段階的な構築という一般的な枠組みによって説明することができる。

しかしながら、以上に概要を示した吉本 (1993) および Yoshimoto (1998) の提案においては、現実のデータにもとづく考察が不足している。今日では日本語についてもツリーバンクの完成により特定の構文の多数の実例を短時間で収集することが可能になっており、多量のデータにもとづく理論の検証によって新しい展開が得られることが期待される。

6 コーパス調査

かいのきツリーバンクは、日本語として最初の、高精度の統語・意味解析情報をタグ付けしたコーパス (ツリーバンク) である (バトラー・長崎・吉本 近刊)。同ツリーバンクが収めるテキストの中から、作例と翻訳を除く 57,705 文を選び、ノデ / カラ従属節を伴う文を主節・従属節の非タ形 / タ形ごとに抽出した。その結果を表1および表2に示す。

以下、分布の4分類のそれぞれについて、詳しい調査結果を述べる。

表1 ノデ節をともなう文

		主節	
		非タ	タ
従属節	非タ	288	140
	タ	41	184

表2 カラ節をともなう文

		主節	
		非タ	タ
従属節	非タ	483	73
	タ	64	70

(i) タ形 - ノデ / カラ - タ形

この構文の実例は、ノデ節で184文、カラ節で70文ある。ノデ節 / カラ節ともに、動作的述語と状态的述語の比率はほぼ同じである。動作的述語の場合、その成立時はすべて主節成立時以前である。状态的述語については、主節成立時と同時のものが大多数（ノデ節で82文、カラ節で37文）だが、主節成立時以前のものも少数ある（12例と3例）。また、主節成立時と同時のものうち、(9a, b)のように非タ形に言換えてもそのまま成り立つものが多いが、文(19)のように言換えることのできないものもある。この例に見るように、一般に、過去の特定の時間を指示する副詞句が出現する場合には言換えできない（日本語記述文法研究会 2007, p. 183）。

- (19) 当時私の家は山小屋ふうの洋館で、板敷でしたので、夜は家の中に入れて自由にしておきました。

調査の結果を表3に示す。

表3 従属節のテンス意味の集計

		ノデ節	カラ節	
従属節述語	[動作的	主節成立時以前	90	30
		状态的	82	37
	[非タ形に言換え可	主節成立時と同時	64	30
		非タ形に言換え不可	18	7
	主節成立時以前	12	3	
計		184	70	

(ii) 非タ形 - ノデ / カラ - タ形

この構文の例はノデ節を持つものは140文、カラ節は73文ある。そのうち大多数の従属節述語は状态的であり、その成立時は主節成立時と同時である。

(20) 俊之は仕事に熱心だから顧客に信頼されていた。

従属節中にあらわれるのが動作述語であっても、反復等の読みを受けて状態的と解されるものが多い。

(21) 叔母の沼間夫人がしつこくすすめるのでしょうことなしにやってきた。

明確に反復の意味を持たないのに主節成立時と同時に動作述語も存在するが、その多くについては、日本語記述文法研究会(2007)の指摘する通り、この用例が継続動詞に限られることから、状態的に使用されていると(少なくとも、一定の間隔で持続しているものとして)解してよいであろう。

(22) 楽しそうなその声に、自分も半べそをかいているのに笑おうとするから、喉に引っかかって聞いたことのない変な音が出た。

状態性述語の中には、以下の例のように発話時と同時に(より正確には、重複)となるものも少数ある。

(23) 俺、一人っ子だから妹ができるって嬉しかった。

しかし、発話時と同時にしかも主節成立時と重ならない用例は一つも無いので、主節成立時と一致(より正確には、重複)する用例の一つのバリエーションと見なしてよい。

従属節の動作述語が非タ形で主節成立時以降の成立を意味する、いわゆる相対テンスの以下のような例は、研究者によってしばしば取り上げられる。

(24) 翌日から出張するので、荷物をカバンに詰めた。

しかし、コーパスの中では、このような用例はきわめて少い。ノテ節で7例にすぎず、カラ節では皆無である。

(25) 二十一歳になると徴兵されるので、「それまでに何でも吸収しよう」と必死だった。

しかも、これら7例のうちで、「応召される」、「徴兵される」、「困る」等、不都合や不利益

を意味する述語を持つものが6例を占める。この構文の従属節動作述語で主節成立時以降を意味するものに何らかの語彙的な制約が関係しているか否かについては、さらにデータを集めて検討する必要がある

(iii) タ形 - ノデ / カラ - 非タ形

ノデ節を伴うもので41文、カラ節で64文がある。この場合、タ形従属節述語はすべて過去を表し、その成立時は発話時以前である。

- (26) それに、理奈のバッグは使用可能だけど、毎日使っていたので、それなりに傷んでいる。

非タ形主節述語のうち状態性を帯びるものについては、その成立時は発話時と重複するので、従属節述語は絶対テンスであると同時に相対テンスでもあることになる。他方、動作的な非タ形主節述語の成立時は未来なので、この場合、従属節述語は絶対テンスであり、相対テンスではないことになる。これには以下のような例があるが、全体として数は少く、ノデ節については皆無、カラ節では3例にすぎない。

- (27) 「ののじゅんさん、もう教授陣も出ましたから、会場行きますよー？」

(iv) 非タ形 - ノデ / カラ - 非タ形

ノデ節を持つ文は288例、カラ節は483例ある。ノデ節については4構文全体の約44パーセント、カラ節については70パーセントを占め、4つの構文の中で断然多い。この偏りがなぜ生じるかを説明するためにはノデおよびカラの用法について根底からの検討を行う必要があるが、今後の課題とする。

(iii)と同様に、主節述語が動作的である場合、従属節述語は絶対テンスであるが相対テンスではないことになる。しかしそのような例は少く、ノデについては6例、カラについては47例しかない。カラ節を伴う複文については、主節述語が命令形や「～てください」等の命令・依頼や勧誘の発話行為を表す文が28例あり、多数を占めるという特徴がある。

7 複文テンス情報処理モデル

テンスに限らず、言語の意味解釈に関する規則はしばしば例外を伴う。大多数の言語デー

タについては単一の規則で説明できるが、同時にその規則に反する少数のデータについて説明が必要とされることが少くない。このような、大多数のデータに適用される、デフォルトとしての規則と少数の例外に対する扱いとを両立させるフォーマルな理論として、デフォルト推論（モノトニック推論）が検討されてきた。Lascarides and Asher (1993) はテキストのテンス情報の解釈について、また Asher and Lascarides (2003) はテキストのディスコース関係の全般的な解釈について、デフォルト推論を用いた解決を提案している。本稿ではそのような精緻な理論的検討を行う余裕は無いが、文階層説にもとづく階層ごとのテンス情報の導入（言換えれば、上位の節のテンス情報の継承）という大枠の下で、ツリーバンクの調査により明らかになった例外的な言語データを説明することが、デフォルト推論を用いた形式化により可能になることを示す。

日本語複文のテンス意味を解するための規則を以下のとおり提案する。

- (28) a. ノデ / カラ節述語 \sim B 節述語
 b. もしも ノデ / カラ節述語 \wedge B 節述語 = \perp なら,
 ノデ / カラ節述語 \rightarrow C 節述語
 c. B 節述語 \rightarrow Ss = Em
 d. C 節述語 \rightarrow S = U
 e. 述語タ形 \sim E < S
 f. もしも B 節述語でしかも状態的なら,
 述語タ形 \rightarrow E \circ S
 g. 状態述語非タ形 \rightarrow E \circ S
 h. 動作述語非タ形 \rightarrow S < E

(28a, e)の \sim はデフォルト推論を示し、例外的な規則の適用を許す。 \rightarrow は通常のモノトニックな規則を示し、例外の存在を想定していない。 \perp (ボトム) は偽を表す命題であり、ここではノデ / カラ節述語であると同時に B 節述語であることが矛盾することを表している。

以下、かいのきツリーバンクの検索により明らかになった、例外的事象を含む言語データが (28a-h) の適用によりどのように説明されるかを示す。

(i) タ形 - ノデ / カラ - タ形

前節に示したように、この構文の例の大多数において、従属節の基準時は主節の成立時と一致する。そのため、従属節述語には (28a) を適用して、B 節述語とし、さらに (28c) を適用する必要がある。他方、タ形の従属節述語の解釈を (28e) で行くと、その成立時が主節成

立時以前となってしまう。このような用例に対処するために、(28f) で B 節の状態的タ形述語については例外的に Es と Ss とが重複するものしておく。例文と、そのテンス解釈の各段階を以下に示す。

(29) 私が黙っていたので、彼はもう一度同じことを繰り返した。

(30) (28f) タ形従属節状態述語：Es ○ Ss

(28a,c) ノデ / カラ, B 節：Ss = Em

(28e) タ形主節述語：Em < Sm

(28d) 主節 (C 節)：Sm = U

結果として、Es ○ Ss = Em < Sm = U となり、Es ○ Em < U と集約される。この解釈の場合、タ形の従属節述語はその成立時が基準時と同時であることを表すので、いわばタ形としての機能を果たしていないことになる。(多くの伝統的研究におけるようにこれを絶対テンスだとしてしまえばタ形の意味は説明されるが、それだけだと、Es と Em の間の関係が説明されない) 英語の「時制の一致」は原則的には日本語には認められないが、この用法に限っては英語の時制の一致に類似している。

なお、以上の例と同様に主節成立時を基準時とし、従って B 節述語と考えられるにもかかわらず、従属節成立時がそれ以前であることから、(28e) を適用せねばならない文も、少数ながら検索結果の中に存在する。

(31) このようなものが残っているとは露ほども思っていないので感激もひとしおでした。

このような例を扱うための一つの可能性として、(28f)を廃してしまい、この構文の従属節述語には(28e)のみが適用され、そのため原則的にすべて主節成立時以前の成立時を持つとすることが考えられる。(9a)のような多くの例については、成立時の延長が主節成立時まで及んでいると解するのである。今後の課題とする。

また、これも前節に述べたように、過去の特定の時間を表す時間副詞句等が従属節に出現する場合には、(29)のような大多数の例とは異なり、非タ形による言換えが不可能である。

(32) 当時私の家は山小屋ふうの洋館で、板敷きでしたので、夜は家の中に入れて自由にしておきました。

このような時間副詞はテンス情報の一種としてC節に帰属することから、当該の従属節にはC節として(28d)が適用されると考えることにより、説明することができる。

- (33) (28e) タ形従属節述語：Es < Ss
- (28b,d) ノデ/カラ，C節：Ss = U
- (28e) タ形主節述語：Em < Sm
- (28d) 主節 (C節)：Sm = U

結果として、Es < U かつ Em < U となる。これだけでは Es と Em とは無関係のままだが、時間副詞の情報の共有を通じて関連づけられるものとする。

(ii) 非タ形 - ノデ/カラ - タ形

従属節述語が状態的である場合、先にも述べたように、大多数の例においてその成立時は主節の成立時と重複する。この場合、従属節はデフォルトとしてのB節であると考えられ、(28c)が適用されることから、従属節の成立時はその基準時とも重複することになる。ツリーバンク中の例文(34)の解釈の過程を(35)に示す。

(34) 私が黙っているので、彼はもう一度同じことを繰り返した。

- (35) (28g) 非タ形従属節状態述語：Es ○ Ss
- (28a,c) ノデ/カラ，B節：Ss = Em
- (28e) タ形主節述語：Em < Sm
- (28d) 主節 (C節)：Sm = U

結果として、Es ○ Em < U となる。

しかしながら、一部の例の中には、従属節述語の成立時が発話時と重複するものも見られる。しかし、これらにおいては現在(発話時)を表す表現(時間副詞句等)が明示的に出現することから、従属節はB節でありえず、例外的に(28d)が適用されてC節とされるのだと考えられる。

- (36) 今の正式名称があまりにも長いので、略して女川フィールドセンターと呼ぶようになりました。

- (37) (28g) 非タ形従属節状態述語：Es ○ Ss
(28b,d) ノデ/カラ，C 節：Ss = U
(28e) タ形主節述語：Em < Sm
(28d) 主節 (C 節)：Sm = U

(37)の結果，Es ○ U かつ Em < U となる。

(38)のように従属節述語が非タ形で動作的であるものは前節で述べたように全体の中では少数であるが，B 節に属しさらに(28h)の適用により基準時以降の成立とすることで処理できる。

- (38) 二十歳になると徴兵されるので、「それまでに何でも吸収しよう」と必死だった。

- (39) (28h) 非タ形従属節動作述語：Ss < Es
(28a, c) ノデ/カラ，B 節：Ss = Em
(28e) タ形主節述語：Em < Sm
(28d) 主節 (C 節)：Sm = U

(39)により，(38)の解釈は Em < Es かつ Em < U となる。

- (iii) タ形 - ノデ/カラ - 非タ形 および
(iv) 非タ形 - ノデ/カラ - 非タ形

(iii)の場合，タ形従属節述語はすべて過去であり，したがって成立時は発話時以前となる。主節述語が状態的であればその成立時は(28g)により発話時と重複するので従属節はデフォルトのB 節でよいが，主節が動作述語を持つ場合には，発話時と同一である主節基準時よりも主節述語成立時が後になる (U = Sm < Em)。そのため，従属節はB 節のままでいられず，(28b)によりC 節として解釈されることになる。同様に，(iv)の構文についても，従属節述語が状態的であればB 節，動作的であればC 節ということになる。

この不統一を解消するために，吉本 (2004) における提案を踏襲することにする。

英語の時制の一致のために Abusch (1988) が導入した理論上のモーダル助動詞 *woll* を採用して，吉本 (2004) では非タ形の状態動詞・動作動詞双方の基準時を同一に扱うための方法を提案した。これによると，

- (40) 「ののじゅんさん，もう教授陣も出ましたから，会場行きますよー？」

の主節述語「行きます」は、論理式において述語 *woll* (行く) を与えられる。これは、話し手が「行く」ことを意図しているという意味であり、その成立時は基準時と一致する ($Em = Sm$)。 *woll* に埋め込まれる「行く」自体の成立時 (Em' とする) は述語全体の基準時よりも後となる ($Sm < Em'$)。こうすることにより、状態的か動作的かの違いにかかわらず、主節述語の成立時は基準時を介して発話時と一致する。つまり、つねに (28g) と (28d) を適用しているのと同じことになり、統一的な扱いが可能になる。

8 相対テンスと絶対テンス

従属節のテンス解釈の一つの在り方として伝統的に言われてきた「絶対テンス」とは、従属節述語の基準時が発話時と一致する場合である。これに対し「相対テンス」は、当該の基準時が主節の成立時と一致する場合と見なすことができる。(Comrie 1985 は相対テンスをより広く、参照点を基準時とするものと定義しているが、ここでは日本語複文中の従属節テンスの用法に限定する) 伝統的な日本語文法研究において、これらはあたかも二項対立的な概念であるかのように取り扱われることが多かった。

ところが、これまでにしばしば見られたように、これら二つが両方とも当てはまる例も少くない。

(41) 天気が良いので、公園を散歩している。

の文では、従属節述語「良い」の基準時は発話時と一致しており、その意味で絶対テンスだが、主節述語の成立時も発話時と同時であり、したがって従属節の基準時は主節の成立時とも重複するので、相対テンスと呼ぶこともできる。また、先に述べたように、

(10) 鈴木さんは体調が悪かったので、早目に帰らせた。

において従属節述語「悪かった」は絶対テンスだとは言っても、主節述語「帰らせた」と無関係に成立するものではなく、後者との関連づけがいかになされるかについての説明が必要である。

以上をまとめると、伝統的な絶対テンス / 相対テンスの区別は、同時に双方に該当する用例が存在するために、二項対立的な概念として使用することはできない。複文のテンスの類型化のための指標はより正確に捉える必要がある。従属節述語のテンス解釈の基準時が主節述語の成立時が発話時かということを指標とした上で、両方が該当することのあることを認める方が、伝統的に捉えられてきた関係をより明確にすることができる。従属節述語の基準

時が主節述語成立時または発話時、または両方となる用例の解釈は、両述語の動作的 / 状态的、非タ形 / タ形のバリエーションも含めて、すべて(28)に示した少数の規則の適用の組み合わせによって説明することができる。

9 終わりに

ツリーバンクの中の日本語複文の実例のテンス解釈が、例外的な用例も含めて、デフォルト論理の枠組みの下での形式化された規則により、階層的な情報の導入として説明できることを示した。

引用文献

- Abusch, Dorit. (1988) Sequence of Tense, Intensionality and Scope. In: Borer, Hagit (ed.), *Proceedings of the Seventh West Coast Conference on Formal Linguistics*. Stanford: CSLI Publications, 1-14.
- Asher, Nicholas and Alex Lascarides. (2003) *Logics of Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard. (1985) *Tense*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Kamp, Hans and Uwe Reyle. (1993) *From Discourse to Logic*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Lascarides, Alex and Nicholas Asher. (1993) Temporal Interpretation, Discourse Relations and Commonsense Entailment. *Linguistics and Philosophy* 16, 437-493.
- Yoshimoto, Kei. (1998) *Tense and Aspect in Japanese and English*. Berlin: Peter Lang.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト — 現代日本語の時間の表現 —』 ひつじ書房
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』第6巻第5号, 明治書院
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ」岩倉具実教授退職記念論文集『言語学と日本語問題』くろしお出版; 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第II巻, くろしお出版, pp. 313-358 に再録
- 日本語記述文法研究会 (2007) 『現代日本語文法 3』くろしお出版
- バトラー-アラスティア・長崎郁・吉本啓 (近刊) 『コーパス日本語学入門 — 高精度文法アノテーションを利用した日本語研究への誘い —』くろしお出版
- 三上章 (1970) 『文法小論集』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館
- 吉本啓 (1993) 「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」, 『言語研究』103, pp. 141-166
- 吉本啓 (2004) 「日本語複文テンスの構成的意味論: 英語との対照の観点から」, 佐藤滋・堀江薫・中村渉 (編) 『対照言語学の新展開』 pp. 229-253, ひつじ書房

Inheritance of Temporal Information in Japanese Complex Sentences

Kei YOSHIMOTO

Abstract

The interpretation of subordinate clause tense in Japanese complex sentences, which is known to depend on complicated factors, crucially involves Minami's (1974) theory of hierarchical sentence structure. This report illustrates that linguistic data provided by a Japanese corpus with syntactic annotation (treebank) can be explained, using Minami's theory of hierarchical sentence structure as a foundation, within the framework of default inference, which allows both typical and exceptional grammatical rules to work together.

Keywords: tense, semantics, formal semantics, Japanese grammar, complex sentences, subordinate clauses